

〔翻 訳〕

(批評)

『不可能純粋

——黒性, 女性性, ヴィクトリア朝文化——』*

スーザン・グーバー 評

浦崎 佐知子 訳

流行のフュージョンフードのように、今日、批評は新しさと刺激の強いピリ辛風味 (“zesty”) のコンビネーションをもちこんでいる。そのタイトルが示すように、ジェニファー・ドゥヴィアー・ブローディーの『不可能純粋』は多数の学術領域から発生する方法論、つまり学問の料理メニューを並べた仮想のバイキング料理店に発生している方法論のごく新しい接触混成 (クレオリゼーション) によって外形を整えている。フェミニズム批評によって発展した用語はアフリカン・アメリカンスタディーズの研究者が創造した用語と混ざり合い、ポピュラーカルチャーのアプローチはポスト植民地主義批評の実践と共生し、フーコー主義的知見は、ゲイスタディーズの行為的立脚点のなかに確立され定着した言語と勝負を競い合っている。ブローディーによる本書の力強さと脆弱さは、このような批評的雑種性、ハイブリディティに由来している。そのハイブリディティは、19世紀の「環大西洋的交通」と彼女が呼ぶもののなかに循環し流通した文学、そのなかに描出された混ざり合う

* The review essay is on *Impossible Purities: Blackness, Femininity, and Victorian Culture*, by Jennifer DeVere Brody; Durham, NC and London: Duke University Press, 1999. The review essay by Susan Gubar, teaches English at Indiana University, was appeared in *Victorian Studies* 43.1 (Autumn 2000): 183–185. She is the author of *Racechanges: White skin, Black Face in American Culture* (1997) and *Critical Condition: Feminism at the Turn of the Century* (2000).

人種、あるいは越境的性を付与されたキャラクターたちについて語る際に用いられている(74)。われわれがそれを「交差性」「横断性」と呼ぼうと、あるいは「独立した学術領域の崩壊」と呼ぼうと、ジェンダーと人種、セクシャリティ、国家、階級、そして多数のさまざまな差異を結びつけようとする最近よく見られる学術的努力は、さらにより超国家的に定義づけられた人文科学の範囲内で、先見して別個の学問教義の混雑にその成果を見いだしている。

『不可能純粹』の負った批評的系譜の誇り高さ「不純」は、現在ホワイトネスタディーズと称される批評の発生、つまり先見して不可視な白い存在であるということを入種民族のカテゴリーとして認識可能なものにする多面的な学問領域の発生に容易に促進されている。その理由は、白人であるということが人間存在として概念的に広く一般化しており、そしてそれが人間存在というものと咬合しているからである。舞台や映画スクリーン上の minstrel show (吟遊詩人の芸、黒人に扮した白人によって演じられるコミカルな歌謡・ダンス・笑い話など)によるバラエティショーなどの放つ閃光的な衝撃についての研究において、リチャード・ダイヤー、エリック・ロット、そしてマイケル・ロジンらが、その研究分野に貢献している。それはちょうどトニ・モリスン、ポール・ギルロイ、エドワード・サイード、エリック・サンドクイストラが、植民者の罪のイメージネーション上に成立する奴隷制と帝国主義の反射について分析するかれらの著作において、その分野に貢献したのと同様である。フェミニストやゲイスタディーズの研究者はジェンダーや性の方向性という要素を、肌の色や国家を考察する上で、ファクターとして組み入れることでこの議論に参加しているが、結果としてかれらは、20世紀アメリカ文化研究というフィールドに大きく杭を打ち立て道をつけた。ホーテンス・スピラーズ、パーバラ・クリスチャン、アン・ドゥシレ、ヘーゼル・カービー、ヴァレリー・スミス、ワニーマ・ルビアーノ、かれら有色のフェミニストたちは、「人種だけじゃない、ジェンダーだけじゃない (*Not Just Race, Not Just Gender*)」(スミスのブラックフェミニズムについての最新の著作タイトルを借用すれば)ということに焦点をあてるのがいかに重要であるかを強調することにおいて、とりわけ重要な役割を果たしている。そうすると、ブローディーの果たした貢献は、19世紀的文脈のなかでイギリスとアメリカの文化現象間にある国家を超えた相互の影響作用と一緒に、彼女の注意を、人種やジェンダーの問題に結んだことにある。

ダニエル・デフォアの詩『生粋のイングランド人——風刺の歌』(1708)で話を始

めながら、ブローディーは文学が国家のアイデンティティ形成に果たした歴史的な役割について強調する。イングランドという国家アイデンティティの形成とはイングランドの「不純化のルート」(3)について油断なく深い注意を払ったものであり、したがってそれほど白人男性という血統の純粋性についてときに不安を抱えていた。彼女が論じているように、19世紀という時間経過のあいだずっと、安定的なイングランドのアイデンティティという神話を維持する努力は、いや増す経済的、地政学的な圧力の影響を受け続けた。鑄造された用語「ムラタルーン」を効果的に配置しながら、『不可能純粋』の第一章は、『有色の婦人』というタイトルのついた1808年の書簡体小説、ウィリアム・メークピース・サッカレーの『虚栄の市』(1847-48)、そしてディオソ・ブシコーのメロドラマ『オクトルーン』(1859, 1861)のムラッタ、オクトルーン、クオドルーン、そしてクレオールについて考察を加え、1807年の奴隷貿易廃止と1833年の英国、そしてその植民地における奴隷制廃止後の民族主義の勃興を跡づけている。ブシコーのテクストのそれぞれイギリスとアメリカヴァージョンの比較検討は、ブローディーに二つの国家に働いたさまざまな人種民族の政治的問題について深く思考することを許容する。しかし英国女性文学史の研究者たちは、アフラ・ベーン、ファニー・バーニー、そしてマライア・エッジワースによって著された虚構作品の種々雑多なキャラクターについてのいかなる考察も欠如していることについて、彼女たちの作品が19世紀の小説家や劇作家の仮パラメタを打ち立てるのを促して以降、それを不思議な失念の空白として見いだすかもしれない。次の章「色は変えられた」では、ブローディーはヴィクトリア朝のディスコースに見られる人種民族とセクシャルなものの範疇の「硬固化」(59)を跡づけるように探求している。アレクサンドル・大デュマの『黒いチューリップ』(1850)——「完全に黒になるハイブリッド」を創出する探求についての小説——は、ハリエット・ピーチャー・ストウのエリザ・ハリスを「完全に白になるハイブリッド」(63)として読むためのステージを用意する。それは白く塗られたギリシャ彫刻の白であり、イングランドにおけるその小説の続編と同様、『アンクル・トムの小屋』(1852)という人々に人気のある劇作品の白である。この章の最後に登場するのは「白-女-黒-運命」(94)の姿形であり、それはアレクサンドル・小デュマの『カミーユ』(1852)のさまざまな劇場的ヴァージョンのなかに、シャルル・ボードレルの『悪の華』(1857)、エドアルド・マネの『オランピア』(1863)、そしてジャン・ポール・サルトルの「ねばねばしたもの」についての記述のなかに現れるそれである。

このようなテキストが照射するのは混血の女性もたらす汚染の危険についてであるのに対して、次の章「仮面の顔」はヴィクトリア朝の小説家、そして劇作家であるチャールズ・リードにとりついた超越的な混-セクシャリティ、つまり彼が周期的に再発を繰り返した服装倒錯に身をやつす女優の肖像画にとりついた超越的な混-セクシャリティを探求する。オスカー・ワイルドの先駆的存在としてリードを見ながら、ブローディーは、H.G. ウェルズの『ドクター・モローの島』(1896)、物語は怪物的に黒化し女性化した存在の姿形へのいや増す不安の記録として、イングランドの国境線が拡大膨張し、したがって外国性への恐怖がエスカレートした時代にあって不可避のリアクションとして解釈されているが、その『ドクター・モローの島』を振り返ることによってアプローチを深化させ世紀末のシニシズムの奥深くへ分け入っている。墮落した存在、混血雑種の言語は世紀転換期の小説家を混乱させるが、かれらは汚染の源的な黒人、ユダヤ人、新しい女の急襲を深く憂慮する。このような理由によって、プラム・ストーカーの『白虫の巣』(1911)についての、あるひとつの読み「純化したイングランド性という白色の性が一瞬、腐敗した不純を仮面で覆い隠す」(176)に帰結することは理にかなっている。

彼女のプロジェクトは明確にそれに専心しているようだが、プロジェクトの自由な余地、そして意味深長な反民族主義者、反女性嫌悪、反同性愛嫌悪的なイデオロギーを提示されてなお、それにしてもなぜ私は批評のフュージョンと呼んでいるブローディーによる本書の、いくつかコースメニューのある料理について満足していないことを見いだすのだろうか。この問いについての答えは、ブローディーのテキストの欠点について語るのと同じくらい、最近の奨学金制度の抱えるディレンマについて語ることに終始する。というのはヴィクトリア朝研究と文化研究関係の専門家として仕事をしているわれわれが、方法論、理論、研究領域、そしてメディアの巨大に拡張した広がり親しんでいることを、われわれ自身や大学院生に強く求めており、多くの奨学金制度はわれわれが『不可能純粹』のなかで出会っているこの種の問題を欠点として有しているからである。もし結果として生じたいくつかのフュージョンが思考にとっての美味なる食事を提供しているとして、他のいくつかは単純に食事を苛立たしいものにしていただけである。ただごた混ぜが寄せ集め(メドレー)、混戦、単純に乱雑なまぜい料理になるポイントは読者によって異なり、たしかにブローディーは大がかりで野心的な広がりのある、変化に富んだデータを駆使して一冊の本を作り上げたということに対して賞されるべきである。しか

しながらブローディーの著作に見られる三つの主だった傾向はある頻度をもって、多くの学術論文だけでなく、円熟した一流の学者陣の研究業績についても間違いを犯している。したがって本書は当然のこととしてよりいっそうのしんしゃくを必要とする。第一の点については私はそれを水平化(レベリング)の形式と呼んでいる、第二の点はある種の予測可能性、第三の点はドン・キホーテ風の空想性のように見えるものと深く関連している。

最初に第一の問題についてである。レベリング(高さを水平にすること)は次のようなときに起こっている。それは『パンチ』の漫画がテニソンの詩と同等の敬意を表され、微細にわたった注意が払われるときであり、ある一人の登場人物が『虚栄の市』あるいは『アンクル・トムの小屋』のような小説から摘み抜かれ、科学的散文のある一節、あるいはフランスのある哲学者から引用抜粋された文章のかたまりのすぐ横に置かれるときである。ブローディーの著作において、それがありうる最高の状態にあれば、このような戦略——今日の文学批評の書き物においてはきわめてふつうのものとなった——は、不測の思いがけない文化的交通に関する魅力的な洞察への導火線の役割を果たしている。しかしながら、もっとも表面的で誠意のない結論にいたっては、本書の戦略は、さまざまなテキストのもつ歴史的、包括的、そして美学的な特殊性を平たくしてしまうほどに脅かしている。第二の傾向についてどうかと言えば、ある文学テキストについてあまりに頻々とする複雑な読みが、今日の文学批評の市場の広がりなかでは自明の公理のように受けとられているかもしれないことを主張するだけに終わっている。そのジェンダーとは行為遂行的であり、その人種とは虚構のそれであり、吟遊詩人たちの芸能は白人の優位を支持し、その人種のパフォーマンスはジェンダー化されたものであり、国家のアイデアは他者化という過程的機制を通して構成されたものである。このような発見や明らかになったことについての彼女の学者ぶった要を得た適切さは、それら缶詰めにされた決まりきった風味を減ずることはない。そして最後、ドン・キホーテ風選択についてであるが、なぜ大デユマや小デユマであって、人種的に抑圧された登場人物を描出した、言ってみれば、ウィルキー・コリンズ、オリバー・シュライナー、チャールズ・チェスナット、そしてマーク・トゥエインら、アングロ・アメリカン19世紀文学の物語でないのか。ときに、かなり多くの奨学金において、批評の対象選択は美学的、あるいは歴史的な理論的根拠によっては、より少なくしか影響されることがないようだが、先行する研究者、批評家によってまだ詳細に説明され理論展

開されていないようなテキストを位置づける努力（あるいはテキスト群を仕切るようなポケットをつくっていく努力）の散見については、より多く影響されるようである。

それでも、このようなただし書きにかかわらず、ブローディーは真正な突破力を表象する著作を上梓した。アフリカン・アメリカンスタディーズの遠近に応じた見方がヴィクトリアンスタディーズに流入することは歓迎されるものであり、時期を得た出来事である。おそらく彼女の次のプロジェクトは、『不可能純粋』を傷つけているだけでなく、もっとも野心的な19世紀と20世紀文化研究の多くを損なう批評的窮地に組みつくことで、『不可能純粋』を押し広げ拡大したものになるだろう。